

大正四年六月二十一日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日發行)

(禁 轉 載)

京都市帝國大學經濟學會 經濟叢論

第 一 號 第 二 十 九 卷

昭和四年七月一日發行

論 叢

消費稅の目的及物體 法學博士 神戶 正雄

勞銀の理論 文學博士 高田 保馬

說 苑

ケネーの租稅理論 法學士 山口正太郎

セイの販路說に就て 經濟學士 谷口 吉彥

シュビイトホフの景氣循環論 經濟學士 靜 田 均

講 演

我國民經濟の實相 法學士 山室 宗文

雜 錄

再び佐田介石に就いて 經濟學博士 本庄榮治郎

プロイセンの地方稅制 經濟學士 安田 元七

動大量と靜大量 經濟學士 木村喜一郎

晩近フランス經濟學界の傾向 經濟學士 松岡 孝兒

最近英國に於ける豫算の業績 經濟學士 中川與之助

近著外國經濟雜誌主要論題

セイの販路説に就て (上)

——(彼れの恐慌論の吟味)——

谷 口 吉 彦

目次	
一 販路説の意義	二 販路説の内容
三 販路説と恐慌論……………	本號掲載
四 販路説の發展	五 販路説の修正
六 販路説の批判……………	次號掲載

一 販路説の意義

不景氣時代に於ける企業家の關心は、如何にしてその商品を販賣せんか、どこに其の商品の販路を求めんかの點に集中される。商品に對して販路を提供するものは何か、何が商品購買力の源泉となるかの問題は、今日に於ける最も緊要な問題の一つであるが、それはすでに資本主義の成立當初からの問題であつた。『困難は生産よりもむしろ販賣にある、販路さへ容易に發見さるゝならば、吾々は常に多量の商品を生産するであらう云々』といふ一句は、すでに百十餘年前にセイの道破するところである。彼れの販路説は即ち、近世的恐慌が漸くその勢を逞しうせんとする十九世紀の初頭に於て、此の問題に對する解答を與へんとして生れ出たものである。

セイは大陸に於けるスミスの祖述者とされる。けれども彼れの祖述は單なる祖述にあらず、スミスの經濟學をとつて、之を『より論理的な、より學問的な順序におくことに成功した』のみならず、さらに『獨創的な、正確な、深遠な二三の議論によつて、斯學に貢献した』ことは、すでに早く當時の學者の認むる所である。而して彼れの獨創に屬すとされる主張の中にあつて、その隨一として一般に認めらるゝものは、即ちこゝに問題とする彼れの販路説 (*Théorie des débouchés*; *loi des débouchés*) である。

販路説に就ては、セイ自身も大に之を得意とせるものゝ様である。彼れはその著、*Traité d'économie politique* 第五版の緒論の中に述べて、『全自然を人類の支配の下にもたらししたものゝは、熱の理論と槓杆の理論と斜面の理論である。やがて世界の政策を變更するであらうものは、交換の理論と市場の理論である』と豪語してゐる。ところがセイと同じ時代の學者の中にあつて、販路説の獨創性を認めたものにリカードがある。彼れは原論第一版(一八一七年)の序文に於て、セイの獨創的な見解の一例として之を指摘し、販路説は、『この卓越した學者(セイ)によつて、初めて解説された』と私の信する所の極めて重要な諸原理を含んでゐる』と裏書してゐる。然るに同じ時代の學者でもマルサスの如きは、必ずしもセイの獨創性を認めず、類似の主張がすでにミルによつて述べられたことを指摘する。²⁾

その後の學者にして販路説を最も尊重したものゝ一人としてブランキをあげることが出来る。彼れは言ふ、『此のフランスの學者に不朽の名聲を保證したものは、彼れの販路説である。此の

2) D. Ricardo; *Principles of Political Economy and taxation*, preface (Gonnors édit., p. 2.)

3) D. Ricardo; *Principles*, (ibid., p. 2-3.)

4) *Traité d'économie politique*, 5^e édition (1826), Discours préliminaire, p. ciiij.

説は排他主義に最後の止めを刺し、植民制度の没落を促進した』⁶⁾と。之に反して今日の學者の中には、此の税の獨創性を疑ふものも少くない。例へばリスト教授の如きは、『此の説はたゞスミス及びフイジオクラートにありふれた考へを言ひ表はしたに過ぎない』⁷⁾と極言してゐる。吾々は後に此の理論の歴史的発展を顧みるに當つて、此の點にも觸れるであらうけれども、しかし理論史としての興味は、かゝる獨創性の如何よりも寧ろ、産業革命を経過したセイの理論が如何に時代の影響を免れ得なかつたか、またセイ自身が、時代を経過し論争を重ねるに従つて、如何に發展し修正されたかの點にあると言はねばならぬ。吾々は以下に於て先づ販路説の内容を明らかにしたる後、セイ以前及びセイに於ける此の理論の發展を跡づけ、最後に説そのものの批判を試むることによつて、此の説が今日の理論から見て如何なる意義を有するかを吟味するであらう。なほ吾々は是等の取扱に於て、常に之をかれの恐慌論としての視角から見るこの理由あるを信するものである。註

註 セイの *Traité* の前半は増井教授によつて邦譯せられ、經濟學古典叢書の一として出版(上巻大正十五年)されてゐる。此の譯書に附せられた『經濟學』解題及び『セイの生活』は、恐らく吾國に於ける最も詳細なるセイに關する研究であらう。此の譯書が一日も早く完成せられんことを吾が學界のために希望してやまない。

二 販路説の内容

生産物に對して販路を提供するものは何か、何が商品に對する購買力を提供するか? セイに

5) D. Ricardo; *Principles*, (ibid., p. 3.)
6) T. R. Malthus; *Principles of Political Economy* (1820), p. 354.
7) Blanqui; *Histoire de l'Économie politique* (1882), p. 401.
6) C. Gide et C. Rist; *Histoire des Doctrines Économiques* (1926), p.

於ける問題はこれであつた。之に對する彼れの根本命題は、『生産物を購買するものは生産物である。』¹⁾即ち『生産物は互に一方が他方を購買するのである。』²⁾といふにあつた。もとより彼れと雖も、生産物を直接に購買するものが貨幣であることは、之を否定するものではない。たゞ彼れは更に進んで考へる、此の貨幣は然らば何處から得られたものか。彼れに従へば、そは他の生産物を賣ることによつてのみ得られる。それ故に生産物を購買するものは、直接には貨幣ではあるが、究極的には他の生産物であると。この簡明直截な命題が即ち彼れの販路説の根本原理である。

この原理は彼れに従へば、不景氣の原因に關する世俗の謬見を正すものである。世俗の見解に従へば、『彼等の生産物の賣れ行きが緩慢困難で、利益の少い時には、彼等は貨幣が不足である』³⁾と言ふ。然し乍ら、『貨幣が不足するから販賣が行はれない』⁴⁾といふならば、それは手段を原因と取違へてゐる。此の場合に犯す誤謬は、……媒介物に過ぎないものをすべての取引の目的なるかに見ることから来る。販賣の行はれないのは貨幣が少いからではなくて、他の生産物が少いからである……何となれば、媒介手段に過ぎない貨幣は、媒介すべき商品の分量に應じてそれ自身を調節し、若しそれが不足する場合には、直ちに補充手段としての信用手段が現はれて、その不足を補つてゆくからである。それ故に不景氣對策の一つとして、今日一部の學者の唱ふる信用統制策の如きは、セイに従へば、明らかに理論的誤謬にもとづくものとして斥けらるべき筈である。

この根本原理に對する第一の疑問は、軍人・官公吏等々の謂はゆる不生産的消費者の購買力に

- 1) J.-B. Say; Cours complet d'Économie politique 3^e édition (1852), Tome I, p. 339, 340.
- 2) J.-B. Say; Sur la Balance des Consommations avec les Productions (Oeuvres diverses, 1848, p. 250.)
- 3) J.-B. Say; Traité d'Économie politique, 6^e édition (1841), p. 138.

就ていあらう。何となれば彼等の購買力は、明らかに他の生産物を賣りて得たるものではないからである。然し乍らセイの見解に従へば、是等の階級は何れも生産階級に寄生するものであり、彼等の購買力資源は、先づ收税吏によつて生産者から取去られ、次いで彼等の間に分配されたものである。従つて彼等の購買力は、生産者がその生産物を賣つて得たる購買力の一部を代位せるものに外ならぬ。それ故に生産物を購買するものは他の生産物であるといふ原理は、此の場合にも正しくあてはまると彼れは主張する。

この原理に對する第二の疑問は更に重要である。購買力資源は生産物を賣ることによつて得らるゝとすれば、賣るべき生産物を所有せざる階級——彼れに於ては地主階級と勞働階級——の購買力は然らばどこから來るか？ 此の事實に當面してかのマルサスは、商品の大部分は商品に對してよりもむしろ勞働に對して交換せらるゝと主張したのであるが、セイに於ても此の事實を如何ともすることは出来ない。この事實を率直に認むると共に、販路説の原理を維持せんとする努力は、セイをしてその名辭の内容を變更または擴張せしむるに至つた。即ち彼れは『生産物』なる名辭の内容を擴張して、勞働者の提供する勞務をもまた一種の生産物とする。『勞働者の勞務もまた一の非物質的生産物である』とすることによつて、生産物を以つて生産物を購買するといふことゝ、勞働を以つて生産物を購買するといふことは、彼れに於ては同義となつた。このことを最も明瞭に言ひ表したものは、マルサスに對する彼れの抗辯の結語であらう。曰く

「貴下(マルサス)は言はるゝ、商品はたとひ商品に對して交換さるゝものではない、それはまた勞働に對しても交換されると。」

4) Traité, 6^e édition, p. 139-140.

5) ibid., p. 140.

6) ibid., p. 140-141.

7) J.-B. Say; Première lettre à M. Malthus (1820), (Oeuvres diverses, 1848. p. 452.)

いま若しこの勞働が、一つの生産物であつて、一方の者が賣つて他方のものが買ひ、買つたものが之を消費するのだとすれば、私は之を一の商品と呼んで少しも苦しくない。そしてこの勞働もまた一の生産物であるから、之を他の諸商品と同視することは、貴下にとつても大した苦痛ではあるまい。そこで若しも此の二者をば、生産物といふ共通の名辭の下に、包括し得るならば、貴下も恐らくは、人はたゞ生産物を以つてのみ生産物を購買するのだといふことを是認することが出来るであらうと。

たゞに勞働のみならず、資本の提供する勞務(生産力)も、土地の提供する勞務(地力)も、彼れに従へば同様に生産物(非物質的)である。『勞働といふ言葉を擴張して、資本及び土地の提供する勞務にも用ひ、商品はすべて勞働によつて購買されると言ふ』⁹⁾ことが出来る主張する。

而してこれらの勞賃・利潤・地代は、スミスに於けると同じくセイに於てもまた、價格の構成部分となすものであり、従つてまた三階級の收入を形成する。即ち『生産物の價值が生産者の間に分配さるゝことによつて、彼等の收入を形成する』¹⁰⁾それ故に購買力資源は生産物であるといふこと、それは各人の收入であるといふことは、同義となる。このことを彼れは次の如く言ふ。

『貨幣なるものは、彼れの土地・資本・勤勞の手段によつて彼れ自身の作り出した生産物の價格にすぎない。……彼等は先づ第一に其の生産物を貨幣と交換し、次いで此の貨幣を消費物と交換する。そこで眞實には、彼等が購買するのは彼等の生産物を以つてするのである。従つて彼等にとつては、彼等自身により、或は彼等の資本及び土地といふ手段によつて生産した價值よりもより大なる價值に於ては、何物をも購買することは出来ない』¹¹⁾『何れの場合でも、吾々は生産的勞務(土地・資本・勞働)を以つて商品を購入するのであり、従つて吾々が生産的勞務を外部に向つて提供すること多ければ多い程、ますます多くの商品を購入することが出来る』¹²⁾

收入または所得をもつて購買力資源となすことから、更に一步を進めて彼れは、生産を以つて購

8) Première lettre, (Oeuvres diverses, 1848. p. 456-457.)

9) Première lettre, (ibid., p. 451.)

10) Première lettre, (ibid., p. 449.)

11) Première lettre, (ibid., p. 440.)

12) Première lettre, (ibid., p. 451.)

買力資源となすに至る。蓋し収入または所得を各人にもたらすものは、土地・資本・勞働の提供する勞務を購入して之を生産的作業に統一する所の企業家の生産に外ならないからである。¹³⁾「……物の價值が尊重され支拂はるゝことを期待し得るのは、たゞ何人か此の物を取得し得る手段を有する場合に限られる。此の手段（購買力）は何から成るか？ 他の價值・他の生産物・他人の勤勞・資本・土地の所産これである。このことから、一見矛盾せるかに見えるけれども、生産物に對して販路を開くものは、生産であるといふことが結論される¹⁴⁾」のである。

要するに彼れに於ては、生産物に對して販路を提供するものは、第一にそれを賣ることによつて貨幣を得る所の生産物であり、第二に地主・資本家・勞働者・企業家の提供する生産的勞務であり、第三に是等の諸階級の所得する収入であり、第四に企業家の生産行爲である。而して是等の四命題は、以上述ぶるが如く、彼れに於ては渾然として同義を意味するものとなつてゐる。いま此の議論の正否は姑く別として、これによつて吾々は、彼れの販路説が一方には、フィジオクラート以下の物々交換説に立つと同時に、他方にはスミス以下の價格構成説及び之に連結する分配論に立脚するものなることを立證することが出来る。

セイの謂はゆる『重要なる眞理』の内容は以上の如きものであるが、彼れは更にこの根本原理から演繹せらるゝ若干の結果について論ずる。

その第一の結果は、『生産者が多數なればなるほど、また生産物が増加すればするほど、販路

13) Première lettre, (ibid., p. 449-450.)

14) Traité, 6^e édition, p. 138.

はますゝ容易となり多様となり廣汎となる』¹⁵⁾といふにある。何となれば『一の生産物は、生産を完了する瞬間から、その價値の總額だけ、他の生産物に對して販路を提供する』¹⁶⁾のであるから、かゝる生産物の増加すればするだけ、他の生産物に對する販路を増加することは、殆んど自明であらう。

第二の結果は、『各人はすべての人々の繁榮によつて利益せられ、一種の産業は他のすべての産業の繁榮にとつて有利である』¹⁷⁾といふ、謂はゆる社會連帶説これである。個人と個人、産業と産業との間に於ける此の關係は、同時に地方と地方、都市と田舎、國家と國家との間にも同様に存在せねばならぬ。『都市の人々が田舎の人々によつて利益し、田舎の人々が都市の人々によつて利益する根源はこゝにある。その一方も他方も、共に生産すること多ければ多いほど、購買の實力を増加する。富裕な田舎に取り圍まれた都市は、そこに多數の富裕な購買者を發見し、般盛な都市の附近に於ける田舎の生産物は、より高き價値を有する』¹⁸⁾のは即ちこれである。同様にまた、『一國民は他國民の繁榮によつて利益し、その富裕によつて利益を保證される』¹⁹⁾このことから、『一國が他の諸國の間にあつてあらゆる事情の下に自由主義に従つて行動することは、人道のために貴重である』²⁰⁾といふ彼れの『自由主義』が出發し、また『祖國の領土の擴張は、その國の幸福を危うする故に希望せず、併し自國の繁榮は、他のすべての國を利益する故に、自國のますゝ富裕となることは之を希望する』²¹⁾といふ彼れの『世界主義』はこゝから生れて來る。

第三の結果は、『外國生産物の輸入は、國內生産物の販賣にとつて有利である』²²⁾といふにある。

15) ibid., p. 141.
16) ibid., p. 141.
17) ibid., p. 144.
18) ibid., p. 144.
19) ibid., p. 145.
20) ibid., p. 145.
21) ibid., p. 145.
22) ibid., p. 145.

『何となれば、吾々が外國商品を買ひ得るのは、たゞ吾々の勤勞・土地・資本の生産物を以つてするに過ぎず、その結果として、かゝる貿易は吾々の生産物に販路を保證するからである。』²³⁾フランスの如く國內に金の産出なき國にあつて、金をもつて外國商品を買はんとする場合には、先づその生産物を賣つて金を購入せねばならぬ。何れにせよ『外國に於てなす購入は、商品をもつて支拂ふと貨幣をもつて支拂ふとを問はず、之に照應する販路を國民の産業に保證する』²⁴⁾ものである。外債によつて入超を續けるが如き國民にあつては、この理論の通用されざること言ふまでもない。

第四の結果は、『純粹單純な消費——即ち新たな生産をひき起す以外の目的を有するに過ぎない消費は、一國の富には何等貢獻しない』²⁵⁾といふにある。生産を刺激し富を増進せしむる所の購買力は、生産物である。然るに此の生産物を不生産的に消耗することは、それだけ他の生産物に對する購買力を損耗することに外ならぬ。それが一國の富に貢獻なきことは言ふまでもない。
と。註

註 この點に關して E. Teilhac 氏のセイに關する近業²⁶⁾には『販路説の萌芽』として興味ある一のエピソードを載せてゐる。²⁶⁾な
ほ此の著はセイの理論に於ける販路説の地位につき有益なる研究を含んでゐる。

三 販路説と恐慌論

生産物を購買するものは生産若くは生産物であるといふ主張を確立したセイは、此の原理の上

21) ibid., p. 145.
22) ibid., p. 145-146.
23) ibid., p. 146.
24) ibid., p. 146.
25) ibid., p. 146.

に立つて、容易に一般的生産過剰の存在を否定することが出来た。蓋し『生産物を購買するものは生産物である』とすれば、『人々はます／＼多く生産すればするほど、ます／＼多く購入するであらう』から、『生産物が増加すればするほど、販路はます／＼容易となり、』販賣されざる商品の堆積するが如きは、一般的には殆んど考へられないからである。

然し乍らセイといへども、當時すでに續發しつゝあつた販賣停滯、不況、恐慌の事實は、之を全く否定し去ることは出来ない。また此の事實が當時の經濟界及び經濟學界の中心問題となつてゐることに對しても、彼れは決して無關心であり得たのではない。すでに彼れは此の問題を中心としたマルサスへの公開狀に於て、『先づ第一に私の注意をひく問題は、この世界いたる所の市場に於ける一般的沈滞は何處から來るのか……有利な仕事を見付けるに當つて感ぜらるゝ普遍的な困難は何處から來るのか……といふことにある』と言つてゐる。まことに『一定の時に於て購買者を發見し得ずして流通を阻害するところの、かの商品の大量は何處から來るのか、何故にこれらの商品は互に購買されないのか』といふ問題は、彼れの販路説からは、解決し得ざるかに見える。彼れは之を如何に説明し得たか？

『私は答へる、販賣されざる商品、もしくは損失をして販賣さるゝ商品は、人々があまりに多量にそれを生産したか、または寧ろ他の生産の振はざるために、此の商品に對して人々の有する欲望を超過するからである。一定の生産物が過剰となるのは、他の生産物が不足を來すからである』⁶⁾

『若しもそこに種々なる商品の沈滞や過剰があるとすれば、それは他の諸商品が前者と交換され得るに足るだけの分量に於て

26) E. Teilhac ; L'Oeuvre économique de J.-B. Say, (1927)

27) ibid., p. 8-9.

1) Cours, ibid., p. 339, 340.

2) Première lettre, (ibid., p. 441.)

3) Traité, 6^e édit., p. 141.

4) Première lettre, (ibid., p. 439.)

生産されないからである。若しも後者の生産者がより多く他の商品を生産し得るならば、然らば前者は彼等に不足してゐた販路を發見するであらう。一言にせば、一定種類の生産物があまりに多くあるのは、他の種類の生産物が十分でないからに過ぎない云々」⁷⁾

即ちセイに於ては、すべての商品が同時に過剰となるが如きはあり得ない。生産過剰は常に一定の商品についてのみ起り得る。而して『若しも一定の商品が賣れないとすれば、それは他の商品が生産されないからである』⁸⁾と主張する。吾々はさきにリカアドウの物々交換説が部分的生産過剰の肯定と、一般的生産過剰の否定とに導いたことを見た。⁹⁾いまセイの販路説はまた當然に、全く同様の結果に到達してゐるのを見る。

たゞ茲に注意すべきは、セイに於ては、リカアドウよりも更に一步を進めて、すでに『世界いたる所の市場に於ける、一般的沈滞』も、『仕事を見付けるに當つて感ぜらるゝ、普遍的な困難』も、明らかに認められてゐることである。たゞしかし此の一般的沈滞は、彼れに於ては決して一般的過剰から來たのではない。沈滞は一般的ではあるが、過剰は部分的である。換言せば、一定商品の過剰と一定商品の不足、即ち生産部門の間に於ける比例的均衡の破壊が、よく販賣停滯を一般的ならしめるものであると考へる。勿論この點に關するセイの論議は必ずしも明確ではない。¹⁰⁾また後に述ぶるが如くセイ自身の考へも時代と共に發展しつゝあつた。たゞ吾々はセイの論著全體の上より見てかく解することの彼れの所論に忠實なる所以を信するものである。

然らばセイに於ける部分的過剰は、いかなる原因に歸せらるゝか？ 一定商品が過剰し、一定

5) Traité, 6^e édit., p. 142.

6) Traité, ibid., p. 142.

7) Première lettre, (Oeuvres diverses, p. 443.)

8) Première lettre, (ibid., p. 441.)

9) 拙稿；リカアドウの恐慌論(下)(經濟論叢第二十八卷 第二號 昭和四年二月一日。) 参照。

商品が不足して、流通停滯を一般的にひき起すのは何故か？

『工業を閉鎖せしめ、商業を中絶せしめ、勞働者を失業せしむる所の停滯……此の停滯はもしそれが起つたとすれば、企業家の誤算の結果である。……若しも農業なり工業なり商業なりの企業の指導者が、消費者に適合し得る生産物を作り出すことが出来るならば、もしも彼等が消費を促進するほどの安い價格でそれを産出し得るならば、またもし消費者が彼等の側から交換物を提供するに足るだけ勤勉であるならば、此の停滯はなくなつて、繁榮の手段に化するであらう。』¹⁰⁾

即ち部分的過剰は先づ第一に、リカアドウに於けると同じく、『企業家の誤算』といふ個人的主觀的な原因に歸せらるゝ。従て又それは偶發的なものとされる。『停滯は偶然以外の何ものでもあり得ない。何となればそれは企業家の行爲であるから。すべての種類の産業に於て、その生産すべき生産物を決定し、生産することに同意せる分量を決定するのは、企業家であつて勞働者ではない云々』¹¹⁾といふ。

第二に資本蓄積と生産過剰との關係は、セイに於てはいかに考へらるゝか？ 彼れは先づ第一に、『蓄積の大部分は必然的に緩慢である』¹²⁾と見る。何故かといふに、『すべての人々は、その收入の何たるを問はず、貯蓄する前にまづ生活せねばならず、そしてこゝにいふ生活は、一般に人々の富の程度に應じて、ますます多くの費用を要する。……それ故に資本は、生産界に攪亂をひき起し得るほどの速度をもつては、増殖することは出来ない。』¹³⁾従つてまた資本蓄積より來る生産過剰はあり得ないこととなる。即ち『その性質上極めて緩慢な資本の増殖から起り得る生産物の莫大な過剰は、之をおそれない』¹⁴⁾と樂觀する所以である。

第三に國家の干涉または保護貿易主義は、一般的沈滯の消極的原因をなすとされる。彼れに従

- 10) C. Gide et C. Rist; Histoire des Doctrines économiques, (1926) p. 134-135.
- 11) Sur la Balance des Consommations avec les Productions, (Oeuvres diverses, p. 257.)
- 12) Sur la Balance, (ibid., p. 257.)
- 13) Deuxième lettre à M. Malthus, 1820 (Oeuvres diverses, 1848. p. 467.)

へば、販賣停滯は生産均衡の破壊より來ることとなり、而して破壊されたる均衡の回復は、謂はゆる自然的調節の結果として到達される。然るに國家の干渉または保護貿易主義は、この自然的調節に對する最大の障害となるからである。彼れは言ふ、

「一定の貨物の賣れ行き良からざる時は、正に他の商品の價格の極端に騰貴せる時である。而して此の騰貴せる價格は、生産を有利にする動機として役立つ筈なのであるから、それは自然的もしくは政治的災厄——政府の食欲または無能——の如き不可抗的原因または不當な手段によつて、統制的に一方に此の不足を永續せしめ、そのため他方に過剰を生ぜしめてゐるのになければならぬ。

「いまもし此の政治的疾患の原因が取除かるゝならば、生産手段は生産の後れてゐる方面へ向つて行く。此の方面へ流れ行くことによつて、他のすべての方面の生産は助長される。若しもすべての生産が常にその完全な自由放任に任ぜらるゝならば、一種の生産のみが他に先んじて進むことは殆んどなく、従つてその生産物のみが下落するが如きことは殆んどないであらう」¹⁴⁾と。

同様に外國市場に堆積する過剰の原因の一つは、保護貿易主義に歸せらるゝ。「イギリスの諸法律が無稽な貿易差額説に據つて制定さるゝ代りに、イギリス生産物の支拂に供し得べきイタリ一のすべての生産物をば、寛大な條件の下に入國させると想像する。然る時は、イタリ諸港に堆積してゐるイギリスの商品、更に多くの他の商品が容易にその販路を發見するであらう……」¹⁵⁾要するにセイはスミスを承けて、放任經濟の自然的調節を絶対に信賴する。恐慌は此の自然的調節の不完全なるより起り、従つてあらゆる保護干渉を斥けて完全なる自由放任經濟を成立せしむることは、恐慌對策の第一要件でなければならぬと主張する。吾々は後世の學者が、自由放任經濟をもつて恐慌の根本的原因となせることと思ひ合せて、その極端なる對立に特殊の興味を感じるものである。(未完)

14) Deuxième lettre, (ibid., p. 467.)

14) Deuxième lettre, (ibid., p. 467.)

15) Traité, 6^e 142-143.

16) Première lettre, (ibid., p. 446.)

17) Tugan-Baranowsky; Theorie und Geschichte der Handelskrisen in England, (1901) S. 1-37.